広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	現代朝鮮語における語感を変える音素交替 : 特に母音と子音の音感的類似性について
Author(s)	深見, 兼孝
Citation	ニダバ , 11 : 15 - 23
Issue Date	1982-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047134
Right	
Relation	

論　文

現代朝鮮語における語感を変える音素交替
―― 特に母音と子音の音感的類似性について ――

深　見　兼　孝

0．0　現代朝鮮語において音素の交替が語の指示的意味を変えず語感のみを変えることがあるのはよく知られた事実である。[1] 従来，このような音素の交替が母音に見られる場合と子音に見られる場合とでは，その語感の転換はそれぞれ独自性を有すると考えられてきたように思える。しかし，実際には母音交替と子音交替による語感の転換の間には類似性が認められるように思える。この小編では，交替するある種の母音と子音の間に音感[2]的類似性が存在することを，主として60年代の韓国の短編小説46作品中の色彩形容詞の分析と統計的処理を中心にして明らかにしていくことにする。

対象とする色彩形容詞は，接尾辞 –a/ŏh– によって派生されたもの，及びそれに接頭辞 sä/i– が付いたもので，特に統計的処理の対象は次のものとする：balgah–, bbalgah–, bŏlgŏh–, bbŏlgŏh–（以上“あかい”），gamah–, ggamah–, gŏmŏh–, ggŏmŏh–, säggamah–, säkamah–, siggŏmŏh–, sikŏmŏh–（以上“くろい”）。これらの語は，いずれも母音と子音両方の交替によって派生されたものである。[3]

1．0　語感の差をもたらす交替を行なう母音は相対的に高低の関係にある。Go (1963)によれば，相対的に高い母音の相対的な響度の低さ，相対的に低い母音の相対的な響度の高さが語感とその差を生み出す。この母音の響度の違いは，母音の相対的高低という位置関係による口腔内の共鳴空間の大小に由来すると思われる。興味あることに，口腔内の共鳴空間の大小と響度の高低の関係は，母音がこの種の交替にある場合と単独の場合とではむしろ逆転しているように思われる。李(1958)，Kim (1977)を参照されたい。

問題とする色彩容詞における語感を変える母音交替は ä～i，a～ŏ，o～u である。それぞれのペアの左が相対的に低い母音，右が相対的に高い母音である。交替は語幹のすべての音節において母音調和を保ちつつ行なわれる。

1．1　母音交替によって転換する語感をすべて記述しきることは不可能であろう。しかし，ある程度範囲を定めることはできる。李(？)は語感について「物理的」なものと「心理的」なものを設定し，

色彩の状態に関する語感が必ずしも現われないことを指摘した。しかしながら,1)“醜・美”のような評価的な語感は,対象物の形状に関するものとはいえ多分に「心理的」であって,およそ“快・不快”のような心理状態に関する語感を必然的に伴い,2)色彩の状態に関する語感(“明・暗”,“純粋・あせた”,“清・濁”等)はそれ自体評価的であって,心理状態に関する語感を伴う。次の例を見られたい。1の hŏyŏh– は「歯」が汚れていることは意味しないが,「彼」に対する話し手の否定的な評価,不快感を表わしている。動詞 dŭrŏnä– に注目されたい, 2の nurŏh– の表わす色彩は“きいろ”のうちでも明度彩度の低いものであろう。同時に,そこには否定的な評価が込められており,不快感が現われている。

1. gŭnŭn hŏyŏn irŭl dŭrŏnägo udgo issŏdda. (姜渭秀「歸還」)
   彼は 白い 歯を 出して 笑って いた

2. yŏldäd saljjŭm dŏŏ boinŭn gŭ sonyŏnŭn buhwaŋŭro ŏlguri nurŏhge buŏ issŏsŏ bonräŭi je
   15才ぐらいに 見える その 少女は 浮黄で 顔が 黄色く 浮いていて 本来の 自分の

   ŏlgulgwanŭn panihage dallajin gŏd gatadjiman … (金聖鐘「警察官」)
   顔とは 見るからに 違っているようだったが

したがって,語感には非色彩的なものと色彩的なものをまず認めるべきであろう。さらに,前者において「物理的」な語感と「心理的」な語感の中間的なものとして評価に関する語感を設定することができよう。

ネイティブスピーカー[4]の直感では,対象物の大きさに関する語感は,一方では力感に関する語感,一方では色彩の統一性に関する語感と関係が深い。後者は「混り気があるかないか」ということであり,具体的な色彩の状態に関する語感と結び付いている。次の例を参照されたい。

① hayan/hŏyŏn suyŏm “白いひげ”:明/暗,色が統一/不統一,純粋/あせた
② paran/pŏrŏn dŭl “青い野”:明/暗,若草/繁った草
③ bbolgan/bbŏlgŏn pi[5] “赤い血”:明/暗,清/濁,出血した量の小/大
④ säggaman/siggŏmŏn gurŭm “まっ黒な雲”:色が統一/不統一,静/動
⑤ säparan / sipŏrŏn bulggod “青い火花”:勢いの小/大,大きさの小/大

さらに,次の例のように母音交替による語感の差が大人小人の差,男女の差として現われることもある。これは大きさと力感に関する語感と関連づけられるだろう。②の草の成長に関する語感も一方ではこれに結び付いている。

⑥ bbalgan/bbŏlgŏn ŏlgul “赤い顔”:明/暗,女/男,小人/大人

以上のことから，語感の差が起こる範囲を次のように設定することができよう：A)非色彩的…力感，大きさ，評価，心理。B)色彩的…統一性，具体的状態。B)の語感は，常に現われるわけではないから，色彩形容詞の特殊性と見るべきだろう。

1．2　従来，母音交替による語感の差は完全に相対的なものとされてきた。しかし，李(？)，寺脇(1971)は，接頭辞 sä/i− のない語を対象にして，相対的に高い母音を持つ語に語感が片寄って現われることを指摘している。上の語感の分類で言えば，非色彩的語感についてそうである。また，接頭辞 sä/i− を持つ語と持たない語が比較されているが，青山(1957)の記述にも，相対的に低い母音を持つ語の語感を相対的に高い母音を持つ語のそれと対比している箇所が見える。ここで，接頭辞 sä/i− の有無にかかわらず，相対的に高い母音を持つ語に語感が片寄って現われることを確認しておこう。次の3を上の2と比較されたい。3の norah− は2の nurŏh− といかなる語感についても対比的とは言えない。

3　cŏlhonŭn gŭjŏ ŏrin gŏsŭi norahge ddŭn ŏlgurŭl barabogo issŭl bbuniŏdda.（李範宣「誤發
　チョル木は ただ 幼い子の 黄色く 浮いた 顔を 見つめて いる ばかりだった

　彈」）

次の4と5を比較されたい。少なくとも，評価と心理に関する語感は5の sibbŏlgŏh− のみに現われている。色彩の状態に関する語感もこれが積極的に表わしており，4の säbbalgah− の表わす色彩の状態はこれと対比的にのみ記述できる。

4　murŭpage säbbalgan piga bäŏna issŏdda.（朴起東「退化論」）
　ひざに まっ赤な 血が にじみ出ていた

5　gŭ ddämada sibbŏlgŏn sŏnjipiga gan dŏŋŏricŏrŏm ŏŋgyŏsŏ nawadda.（3と同じ）
　そのたびに まっ赤な 血が 肝の かたまりのように 凝って 出た

次の例の säggamah− には，いかなる語感も伴われていないように思える。

6　gwŏncŏŋŭl cŏŭm bogŭb badŭl ddä nanŭn bumoŭi säggamahge tan sicerŭl yŏnsaŋhädda.（成
　拳銃を 初めて 補給される 時 私は 父母の まっ黒に 燃えた 死体を 連想した

　杰「sebŏnjjä saram」）

語感は相対的に高い母音を持つ語に片寄っていると言えよう。

1．3　寺脇(1971)の相対的に低い母音を持つ語の色彩的意味以外の意味(以下「付加的意味」と呼ぶ)に関する記述の中で，次の3点が注目される：1) その色彩がどのようであるかを表わす，2) その色彩を強調する，3) その色彩が一時的，非本来的であることを表わす。1) は色彩の状態に関する語感のことと思われる。相対的に低い母音を持つ語が色彩的に“明”，“鮮”，“清”，“純”を表わすことは周知のことである。[6] 3) については確認できなかた。[7]

相対的に低い母音を持つ語の付加的意味には強調以上のものがある。次の例を見られたい。

7　gŏmgo gin nalgärŭl gajin gŭ sänŭn imi, supyŏŋsŏn wie piŏorŭgo idnŭn murangä sogŭro
　黒くて 長い 翼を　持った その 鳥は すでに 水平線の 上に わきあがって いる 水霧の 中へ

sarajigo issŏdda.（2と同じ）
消えて　いた

gŏm–は色彩的意味のみを持っている。[8] 次の gil– とともに nalgä の属性を記述しているにすぎない。今，この gŏm– を ggamah– と入れ替えると，7の文脈から恐怖感ないし不気味さが読み取れるようになる。これは“くろい”の含蓄的意味の一つに違いないが，少なくとも，元の文脈では明確でない。ggamah– には，期待される語感ではなく，含蓄的情意的意味が付加されていると言えよう。

pŏrŏh– との対比的な語感(たとえば“小さい”)が paran bulggod “青い火花”の parah– に付加されないと，この表現はこれだけでは成立しない。parah– に付加されるべき情意的意味を表わす文脈が存在しないためであろう。*noran/nurŏn ŏlgul “黄色い顔”の norah– に付加されるべきは nurŏh– との対比的な語感ではなく含蓄的情意的意味と見ることができる。

これら3例において，相対的に低い母音を持つ語の使用如何については，ネイティブスピーカーの間で動揺が存在するのではないかと思われるが，相対的に低い母音を持つ語の付加的意味が，相対的に高い母音を持つ語との対比的な語感ではなく，含蓄的情意的意味である場合があることはこれで確認できたであろう。しかし，含蓄的情意的意味も相対的に低い母音の響度の高さに負っていることは想像に難くない。強調の場合も含めて，この母音の明瞭な響きは，この母音を持つ語に強い訴えの力を与えると思われるのである。

2．0　ここで取り扱う子音の交替は，いわゆる平音，硬音，激音の交替である。喉頭緊張と帯気性の有無[9]を除いて，他の調音特徴は同一とみなされているものが交替する。交替のパターンは，平音と硬音，硬音と激音，または3者相互で，語頭を含む音節の初めに起こる。

色彩形容詞では，語頭で平音と硬音の交替 b～bb, g～gg, sä/i を持つ語の第 2 音節の初めで硬音と激音の交替 gg～k がある。

2．1　次の 8 と 9，10と11を比較されたい。

8．gŭnyŏŭi ŏlguri jŏnyŏgnore balgahge muldŭrŏ issŏdda.（韓勝源「木船」）
彼女の　顔が　夕焼けに　赤く　染まって　いた

9．gŭnyŏŭi ŏlguri tanŭn dŭsi bbalgädda.（同上）
彼女の　顔が　燃えるように　赤かった

10.　balbariŭi gŏmutwitwihan dariesŏ bŏlgŏn pidmuri hŭllŏ närinda.（朴龍三「burŏjin ibbal」）
バルバリの　浅黒い　足から　赤い　血が　流れ落ちる

11.　du myŏgŭi byŏgsaga mag Krŭl megoon dŭlgŏsŭl cimdä wie näryŏ nohnŭn camiŏdnŭnde Kŭi
2　名の　兵士が　ちょうど K を　担いで来た　担架を　寝台の　上に　おろしたところだったが　K の

momesŏ hŭrŭnŭn pinŭn cimdä ŏnjŏrirŭl bbŏlgŏhge muldŭrigo issŏddŏn gŏsida.（趙世熙
体から　流れる　血は　寝台の　縁を　赤く　染めて　いた　のだ

「doddä ŏbdnŭn 葬船」）

8 と 9 では，同一人物のほぼ同じ時間の夕焼けに染まった顔が描写されている。9 に tanŭn dŭsi とあるように，bbalgah– の方が 8 の balgah– より赤さが目につくことを表わすか，あるいは赤さを強調していると言えよう。10と11は血の描写である。10に gŏmutwitwiha– とあるように，bŏlgŏh– の方が11の bbŏlgŏh– より赤さが目立たないことを表わしている。

通時的に硬音を持つ語は平音を持つ語から派生されたと考えられ，[10] 共時的に形態音韻論上平音が硬音と交替する[11] が，硬音を持つ語に語感が片寄って現われるとは言いにくい。3．2 の表 1 が示すように，硬音形の定着は著しく硬音の価値がどれほどのものか疑わしい。この小編ではこの問題は不問にして，平音と硬音の音韻論的関係に即して語感を記述しておく。

硬音を持つ語は，平音を持つ語より色彩が視覚的に強いことを表わすか，色彩を強調する。この違いは，硬音が喉頭緊張を持っているために，それを持っていない平音より強く響くことに由来するのであろう。さらに次の 2 例を比較されたい。

12.　dambäburi dusŏnŏd balgahge tago issŭl gŏsiŏdda.（李哲浩「darhajinŭn saldŭl」）
タバコの火が　2，3，4　赤く　燃えているだろう

13. daŋsinŭi ibesŏn dambäga bbalgahge bunnocŏrŏm tago issŏdda.（呉効鎭「 iŋŏwa ggobcu 」）
あなたの　口では　タバコが　赤く　　怒りのように　燃えていた

2．2　gg～k による語感の転換は，資料の都合上ネイティブスピーカーの直感に頼った。1·1で挙げた④において，säggamah– を säkamah– に，siggŏmŏh– を sikŏmŏh に替えて語感の違いを述べてもらったところ，säkamah–，sikŏmŏh– に「底知れぬ感じ」が加わるということだった。同じことを säggaman/siggŏmŏn bada “まっ黒な海”についても行なったが結果は同じだった。語感は母音の相対的な高低にかかわりなく激音を持つ語に付加される。少なくとも第一義的には硬音を持つ語に語感はない。この「底知れぬ感じ」は激音の帯気性による恐らくは濁った不透明な響きに由来すると思われる。

激音も喉頭緊張を持っていると見た方が，子音の交替による語感の転換を統一的にとらえることができ，「子音加勢法則」[12] に音韻論的解釈を加えることができる。色彩形容詞においては，喉頭緊張は接頭辞 sä/i-の意味と不可分の関係にあると思われる。

3．0　以上述べてきた，交替する母音，または子音の調音上の差，聴覚的印象の差とそれが生み出す付加的意味を改めて示す。

相対的に低い母音と高い母音の交替では，その相対的高低の違いが響度の差を生み出す。前者の明瞭な響きは，それを持つ語に，色彩的に明，鮮，清，純[13] の語感や，何らかの情意的意味を付加したり，色彩を強調する力を与える。後者の不明瞭な響きは，それを持つ語に，色彩的に暗，濁，あせた等の語感や，大きい，力感がある，または心理的評価的に負価である語感を与える。

平音と硬音の交替では，後者が喉頭緊張を持っていることによって前者より強く響き，それを持っている語に，視覚的に強の語感や色彩を強調する力を与える。硬音と激音の交替では，後者の持つ帯気性が濁った不透明な響きを生み出し，それを持つ語に，「底知れぬ感じ」を与える。

3．1　聴覚的印象の面では，相対的に低い母音と硬音，相対的に高い母音と平音，激音が類似していると言えよう。付加的意味に関しては，相対的に低い母音と硬音が類似している。激音の「底知れぬ感じ」が心理的評価的にマイナスに働くことは多分にありうる。その意味で相対的に高い母音と類似していると言えよう。

音感的類似性は，相対的に低い母音と硬音，相対的に高い母音と平音，激音の間に存在すると考えることができる。

3．2　次の表は母音と子音の結合の様相を用例数から見たものである。表1は接辞 –a/ŏh– によっ

て派生された語について色彩別に，表２は sä/i− によって派生された語について，母音と子音のそれぞれの組み合わせの用例数とその対総用例数比(％，小数第１位まで)を示したものである。例えば，相対的に低い母音と平音の組み合わせは低−平というふうにする。他も同様。

表１

	あかい		くろい	
低−平	5	6.8	0[14]	0
低−硬	53	71.6	39	86.7
高−平	14	18.9	1	2.2
高−硬	2	2.7	5	11.1
総用例数	74		45	

表２

低−硬	23	56.1
低−激	1	2.4
高−硬	3	7.3
高−激	14	34.1
総用例数	41	

表１，２から，母音は相対的に低い母音，子音は硬音が用いられる傾向があると言える。後者の傾向は，表１の“くろい”について特に著しい(硬音を持つ語の用例数は全体の98％近くを占める)。この表で見る限り，平音と硬音の交替はあまり行なわれていないと言えよう。相対的に低い母音に比べて相対的に高い母音が用いられない傾向にある(いずれも相対的に高い母音の用例数は全体の半数以下である)のは，この母音が一定の語感をもたらすためであろう。

表１の“くろい”を除けば，第２位の高−平(表１)，高−激(表２)は，第１位の低−硬(表１，２)を除く用例数の過半数を占める。相対的に低い母音は硬音と，相対的に高い母音は平音，激音と結合する傾向にある。つまり，音感的に類似している母音と子音が結合しやすいのである。音感的類似性は母音と子音の結合を規制していると言えよう。さらに言えば，母音と子音の交替は，補い合うように，または相乗的効果を生むように語感を転換させているのである。

４．０　色彩形容詞においては，相対的に低い母音と硬音，相対的に高い母音と平音，激音の間に音感的類似性が存在する。また，この音感的類似性は母音と子音の結合を規制している。以上がこの小編の結論である。他の意味分野に属す語についての考察は別の機会に譲ることにする。

注

1．母音交替は中期朝鮮語にも見られるし，これが意味の分化を起こした例も知られている。

2．以下の議論は音象徴論に属す。言語音に対する感覚，あるいは感性という意味で音感ということばを用いることにする。

3．これらの語の史的変遷については青山(1966)参照。

4．例文1とここ．1・3の例文7以下，および1・4の記述は朴洋子(1943年ソウル市出身)氏からの情報に基づいたものである。

5．さらに詳しく尋ねたところ，力感の小/大が感じられるということだった。

6．しかし，テキストの分析から，相対的に高い母音を持つ語と違って，心理や評価に関する語感を伴わない傾向があることがわかった。

7．接辞 –a/ŏh– の起源的意味に係わることかもしれない。中期語では，ϕ接辞による派生語にも母音交替があった。

8．gŏm– ま形式的に見てϕ接辞による派生語である。ϕ派生の色彩形容詞の意味については，李(？)，寺脇(1971)，梅田(1971) pp. 140－141参照。

9．平音，硬音，激音の音韻論上の関係については Hŏ (1978[2]) p. 206参照。

10. 青山(1966)参照。

11. 具体例については Hŏ (1978[2]) pp. 269－271参照。また，現代日本語における清音と濁音の交替によるニュアンスの転換について鈴木(1962)の考察がある。

12. 鄭(1938)参照。ただし，/h/ の扱いについてなお問題が残る。

13. 注6参照。

14. 青山(1962)は，gamah– ～ gŏmŏh– において意味の分化が進行中である可能性を指摘しているが，具体的論述がない。色相に関係のない“しろ”，“くろ”が光の状態と結び付くことはあって，母音交替が色彩から光の状態へ意味を分化させる傾向を見せているのは，今回の調査では sähayah– ～ sihŏyŏh– であった。

なお，色彩形容詞の語源や同源語について，寺脇(1971)と田(1941)の言及がある。

参 考 文 献

青山秀夫(1957)，“現代朝鮮語の音感的特徴” 天理大学報25

————(1962)，“同義語 e 対 han 一考察” 朝鮮学報24

————(1966)，“朝鮮語の色彩形容詞について” 朝鮮学報30/40

梅田博之(1971)，“現代朝鮮語基礎語彙集” pp. 140－141 アジア・アフリカ言語文化研究所

鈴木孝夫(1962)，“音韻交替と意義分化の関係について” 言語研究42

寺脇康子(1971), “朝鮮語の色彩形容詞について” 大阪外国語大学卒業論文(未刊)

李 文 子(？), “朝鮮語色彩語の意味分析に関する一考察 —— 特に陰母音を中心に” 研究発表用原稿(未刊)

Go Sinsug (1963), “ Hyŏndä jŏsŏnŏ saŋjiŋŏŭi ŭimironjŏg tŭgsŏŋ ” Jŏsŏn Ŏhag 1963－3

李 崇 寧(1958), “音聲象徵再論” 文理大學報(ソウル大) 7 － 1

田 蒙 秀(1941), “色彩語彙考(一), (二) —— 訓蒙字會 ŭi 研究 ŭi 一節” Hangŭl 88. 89

鄭 寅 承(1938), “語感 表現上 朝鮮語 ŭi 特徵 in 母音相對法則 gwa 子音加勢法則” Hangŭl 60

Hŏ Uŋ (1978[2]), “國語音韻學” p. 206, pp. 269－271 正音社

Kim, Kong-On (1977), “ Sound symbolism in Korean ” Journal of Linguistics Vol. 13 Nom. 1